

# 榎垣外・梨久保 遺跡発掘調査報告書 (概報)

平成元年度 榎垣外遺跡ほか分布調査報告書



長野県岡谷市教育委員会

# 序

平成元年度の榎垣外遺跡ほか岡谷市内遺跡群試掘・確認調査（詳細分布調査）及び緊急発掘調査の報告書（概報）を刊行することになりました。

岡谷市内には170ヶ所をこえる多くの遺跡が確認されています。近年の開発、とくに住宅建設に関連した遺跡範囲内での土木工事は増加しており、本年の調査件数も28件にのぼり、貴重な埋蔵文化財が発見されました。

このような成果をみるたびに、岡谷市の長い歴史と先人達の積み上げてこられた文化の尊さをあらためて認識させられます。この貴重な文化遺産を大切にし、さらに岡谷市の歴史と文化を明らかにさせていかなければならないと強く感じているところです。

今年度の調査にあたり、土地所有者各位、工事関係者の方々、そして調査地に隣接した多くの皆様のご好意、ご協力に御礼申し上げます。また、発掘に携わっていただいたみなさんには、炎暑、厳寒の中を御苦労いただき感謝いたしております。

平成2年3月20日

岡谷市教育委員会

教育長 八幡 栄一

# 例 言

1. 本報告書は、平成元年度榎垣外遺跡ほか、岡谷市内遺跡群試掘・確認調査（詳細分布調査）及び緊急発掘調査の報告書（概報）である。
2. 調査は、国庫および県費から補助金交付を受けた岡谷市教育委員会が、平成元年4月20日から平成2年3月20日にかけて実施した。整理作業は主に1月～2月に行ったが、出土品は十分な整理が終了していないため、概要の掲載にとどめてある。
3. 出土遺物、記録図面、写真等の資料はすべて岡谷市教育委員会で保管している。

## 目次

序

例言・目次

1. 平成元年度調査の概要	1
2. 榎垣外遺跡片間丁地籍	3
3. 同上 山道端地籍	4
4. 同上 山道端地籍	7
5. 同上 鱒鱗塚地籍	9
6. 同上 下片間町地籍	10
7. 同上 スクモツカ南地籍	11
8. 日切遺跡 榎垣外遺跡 清水田遺跡（詳細分布調査）	12
9. 梨久保遺跡山之神下地籍	14
10. 同上 上の平地籍	15
11. 同上 上の平地籍	16

## 1. 平成元年度試掘、確認調査（詳細分布調査）及び緊急発掘調査の概要

平成元年度、岡谷市内において周知の遺跡に農地転用、公共事業等の開発行為が計画・実施され、市教育委員会が何らかの対応をおこなった件数は30件をこえ、そのうち、試掘・確認調査は28件に及んでいる。そして、それからさらに緊急発掘したケースは9件2遺跡である。

本年度の調査の特徴は、ここ数年続いている傾向に同じで、長地方面（湖北地区沖積地）の平坦部に調査が集中していることである。そのために、縄文時代の遺構・遺物は梨久保遺跡のように集落の中心部の調査となった例を除いてはこれまでに少なく少ない数であり、代わって奈良～平安時代の遺構・遺物が特に多い結果となった。

調査の中で特に注目すべきものは、榎垣外遺跡の成果であろう。官衙跡を北東端にして2km四方に及ぶ範囲に広がる遺跡だが、今年度、遺跡西端に位置する下片間町地籍において掘立柱建物跡群が発見されるなど横河川自然堤防の縁においても官衙跡とも考えられる遺構が検出された。すぐ南にある山道端地籍や、去年鏡などが出土した柿垣外地籍ともあわせて考えると非常に興味深い問題提起となり、わずかな面積であっても詳細分布調査の重要性を示す結果となった。

なお、緊急発掘調査については以下本文中にその概要を記したが、緊急発掘調査にいたらなかった箇所については下記の表によって詳細は省略した。

表1 平成元年度試掘・確認調査一覧表

遺跡名	所在地	調査の原因	調査期間	主な遺構	遺構・遺物の時代他
1 榎垣外（片間丁地籍）	長地字片間丁2505-2	住宅建設	4.20 ~ 4.26	住1、塙4	縄文・平安 緊急発掘
2 横川上の原	長地字丸山5835-1他	住宅建設	4.24 ~ 6.1		縄文
3 榎垣外（宮下地籍）	長地字宮下1728-6他	貸駐車場建設	4.24		縄文
4 榎垣外（山道端地籍）	長地字山道端2348他	住宅建設	4.26 ~ 6.1	住4、掘立1	平安 緊急発掘
5 梨久保（上の平地籍）	長地字上の平4588-3	住宅建設	4.29		縄文
6 榎垣外（山道端地籍）	長地字山道端2339-1他	住宅建設	5.2 ~ 7.2	住5、掘立1	平安 緊急発掘
7 志平	川岸東2丁目9864-4	駐車場	5.12		縄文
8 小田井	湊字前林4491-1	工場建設	5.13		縄文
9 榎垣外（蟻塚塚地籍）	長地字蟻塚塚3685-9	住宅建設	6.13 ~ 6.29	掘立1	平安 緊急発掘
10 榎垣外（向田地籍）	長地字向田4710他	駐車場建設	6.17		平安
11 榎垣外（下片間町）	長地字下片間町2373-1	住宅建設	7.4 ~ 7.24	掘立4	平安 緊急発掘
12 東町田中	長地字町尻北3272-イ	駐車場建設	7.17 ~ 7.19		弥生
13 榎垣外（スクモツカ南）	長地字スクモツカ南3136-1	住宅建設	7.20 ~ 7.31	住2	平安 緊急発掘
14 榎垣外（向田地籍）	長地字向田4718-5	工場建設	7.25 ~ 7.31		平安
15 榎垣外（向田通地籍）	長地字向田通4738-2	住宅建設	7.25 ~ 7.31		平安
16 斧磨	大字間下字ツク山	高等学校グ ラウンド造成	8.1 ~ 11.27	塙3	縄文
17 牛平北	2075- 戌- サ	工場建設	8.21 ~ 8.24		縄文
18 目切・榎垣外・清水田	長地4253- イ他	区画整理	9.1 ~ 3.14	住4、塙15	縄文・平安
19 榎垣外（古屋敷地籍）	長地字古屋敷4109-2	住宅建設	9.5 ~ 9.13	住1	平安
20 榎垣外（鎮守東地籍）	長地2992-3他	派出所建設	9.5 ~ 9.22	住1	平安
21 梨久保（山之神下地籍）	長地字山之神下4443-5	共同住宅建設	10.2 ~ 11.8	住2、塙2	縄文 緊急発掘
22 海戸	天竜町三丁目5317-1	貸事務所建設	11.10 ~ 11.14	住1	平安
23 梨久保（上の平地籍）	長地上の平4595-2他	住宅建設	11.10 ~ 11.21	住3	縄文・平安 緊急発掘
24 榎垣外（榎海戸地籍）	長地字榎海戸4062-1	住宅建設	11.29 ~ 12.4		平安
25 梨久保（上の平地籍）	長地上の平4586	擁壁住宅建設	12.4 ~ 12.28	住10、塙22	縄文 緊急発掘
26 榎垣外（栗木海戸地籍）	長地字栗木海戸8666-3	住宅建設	12.6 ~ 3.17		平安
27 榎垣外（榎海戸地籍）	長地字榎海戸4053-2	貸駐車場建設	12.26 ~ 12.28	住1	平安
28 梨久保（上の平地籍）	長地字上の平4574-1他	駐車場建設	3.10 ~ 3.17		





第1図 試掘・確認調査地点 (番号は表1の一覧表に同じ)

## 2. 榎垣外遺跡片間丁地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字片間丁2505-2
2. 土地の所有者 山田 秀樹
3. 発掘調査の期間 平成元年4月20日～4月26日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 70.3㎡
6. 発見された遺構 縄文時代中期住居跡1棟 小竪穴4基

**1号住居跡** 長径約5m、短径約4mのやや楕円形の住居跡である。掘り込みは浅く、覆土は10～15cmほど残っているが、南側の一部は畑の耕作のため削られている。柱穴は6基確認され南側の柱間はわずかに広い。床はやや堅い程度で叩き締められてはいない。炉は中央よりやや北に位置し、15～20cm位の石を7つ使った石囲炉で焼土は殆どない。

**小竪穴** 4基確認されたが、そのうち一基からは土師器甕が出土した。ほかのものは出土遺物も少なく、時代決定にはいたらない。

7. 出土した遺物 縄文土器1 土師器1 石鏃2 石錘1 土器片石片2箱

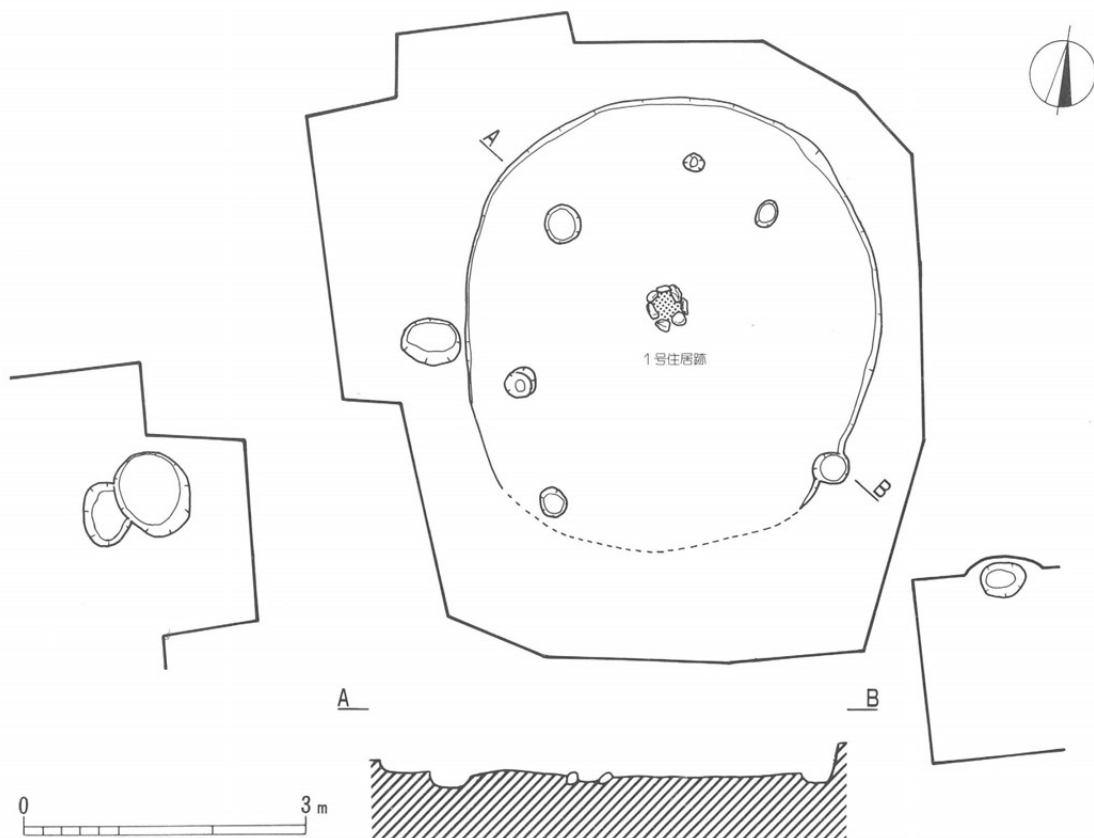
一括土器は一号住居跡床面より、胴部から下半分の縄文土器が炉のすぐ横から伏せた状態で出土した。覆土が薄いためか、まとまった遺物はこれだけである。



第2図 1号住居跡



第3図 1号住居跡出土土器



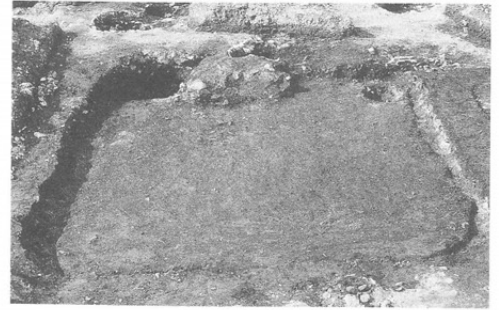
第4図 片間丁地籍遺構全体図(1:80)

### 3. 榎垣外遺跡山道端地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字山道端2348 2349-3
2. 土地の所有者 八幡 益晴
3. 発掘調査の期間 平成元年4月24日～6月1日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 187.8m<sup>2</sup>
6. 発見された遺構 平安時代住居跡5棟 掘立柱建物跡1棟

**13号住居跡** 平面形は南北約4.7×東西4.5mの北側にカマドを配置した方形の住居跡で掘り込みは12～20cmほどである。東側と南側に周溝が検出された。柱穴はなく床面は地山の礫層を踏み固めた程度である。カマドの残存状態は比較的良く、袖幅約1.6m、奥行き約1.1m、天井の石が割れ落ちていたが支柱、袖石はほぼ完全な形で残っていた。煙道は、畑の耕作によって攪乱されていたため確認できなかった。

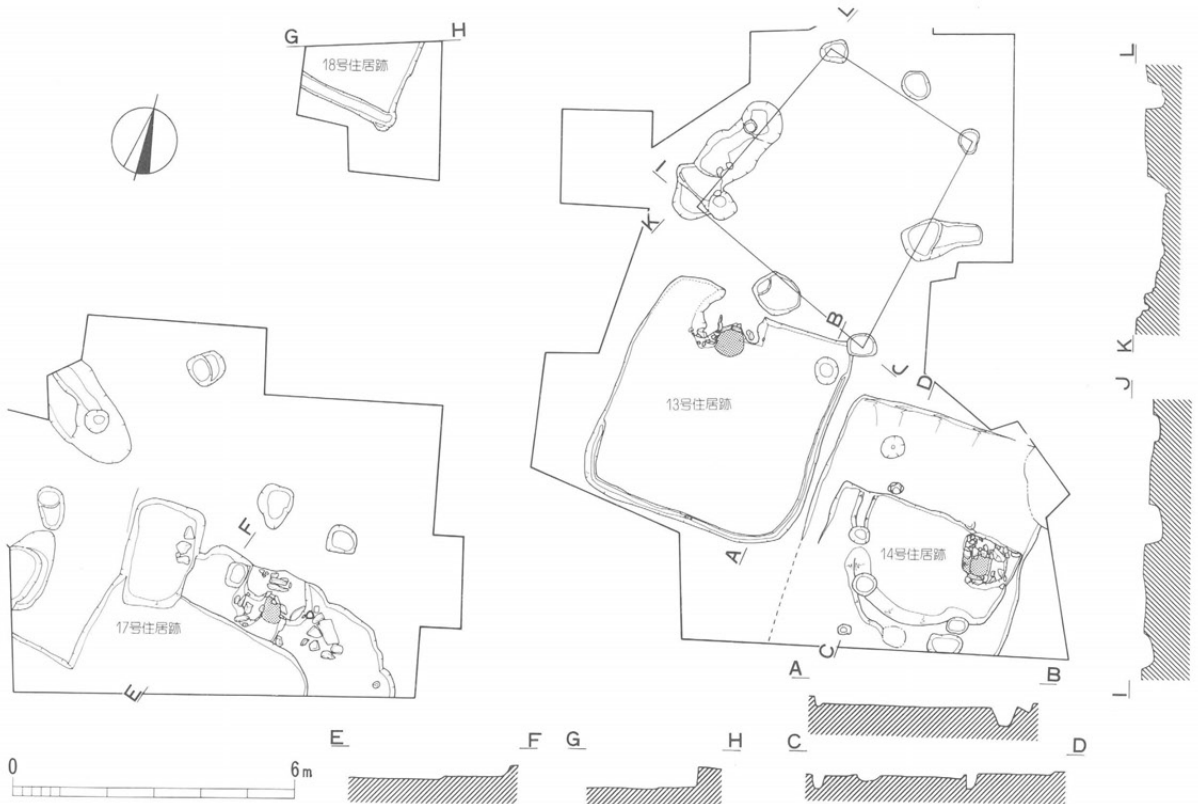
**14号住居跡** 平面形は南北約6.0×東西約4.7mの東側にカマドを配置した方形の住居跡である。カマドの袖幅は約1.2×奥行き約1.0m、煙道は階段状になっているが赤く焼けた面は検出されず焼土も少ない。北側の床面は一段高くなってカマドを囲むようにめぐっており、カマドと居住空間を区切っている。ベッド状遺構と関連するものであろうか。カマド周辺の床は堅く叩き締められている。柱穴は7基検出された。



第5図 13号住居跡



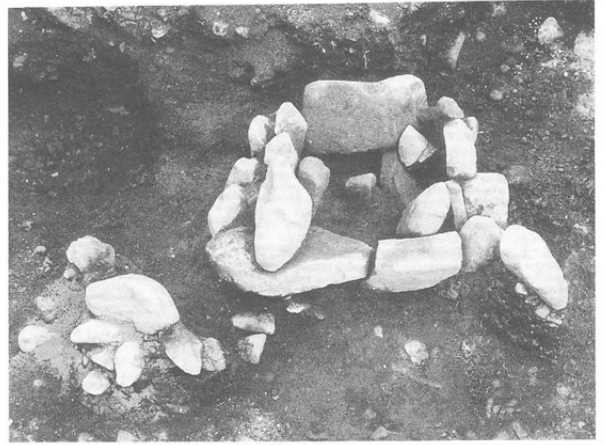
第6図 14号住居跡



第7図 山道端地籍遺構全体図 (1:160)

**17号住居跡** 平面形は東西約6.5mの住居跡で北側にカマドを配置している。カマドは袖幅約1.6m、奥行き1.3mの北カマドで一部煙道が残っていた。支柱は火床面に突き刺さるように立っており、火床の焼土は厚くよく焼けていた。床面はカマドと区切るように段がついているが、他の住居跡との切り合いによる段差とも考えられる。北西隅の張出部は2.3×1.5mの長方形をしており、住居跡の軸とはやや異なった向きをしている。住居跡の約 $\frac{2}{3}$ は調査区外にあり、今回の調査ではカマド周辺と住居跡北西隅の張出部だけの調査となった。

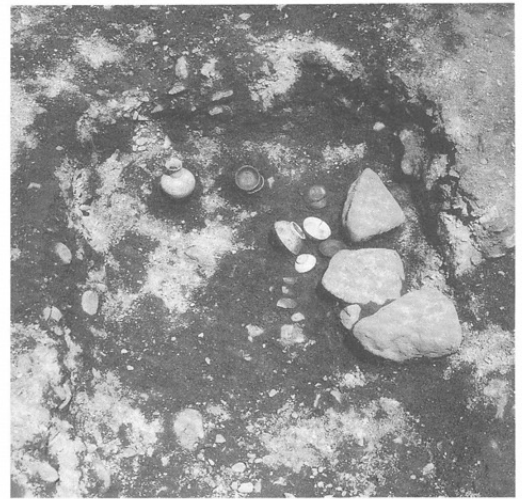
**18号住居跡** 畑の作物等のため住居跡の南東隅を一部調査できただけである。立ち上がりは約40cmで、南壁際には幅30cmほどのやや広い周溝がある。床面は比較的堅い。遺物の出土量から東カマドであることが推定される。



第8図 13号住居跡カマド石組



第9図 17号住居跡



第10図 17号住居跡張出部遺物出土状態



第11図 17号住居跡張出部出土遺物



第13図 17号住居跡出土土師器



第12図 17号住居跡カマド石組



**掘立柱建物跡** 平面形は2間×2間でやや台形をした建物跡である。南側の柱間が広く一間5mあるのに対して北側の柱間は3mしかない。さらに南側の柱穴は直径約1mあるのに対して北側の柱穴は70cm弱である。建物跡の軸はほぼ長軸が南北を向いている。13号住居跡との新旧関係は、掘立柱建物跡のほうが新しい。

7. 出土した遺物 土師器 9 須恵器 6  
 刻書土器 1 墨書土器 4 土錘 2  
 灰釉陶器 6 打製石斧 2 緑釉陶器片 2  
 土器片石片 4箱

住居跡内からの出土遺物は、カマド周辺からの出土が多く床面に近いほど完形品が多い。13号住居跡覆土上層からは、拳大の礫に混ざって多くの土師器、須恵器が出土した。17号住居跡張出部からは、9点もの灰釉陶器や須恵器、土師器がまとまって出土した。刻書土器「十」、墨書土器「浄」はすべて17号住居跡からの出土である。



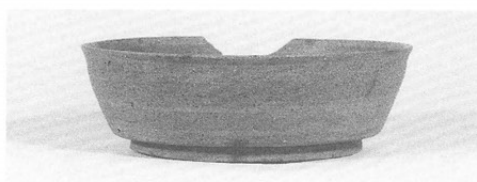
第14図 18号住居跡



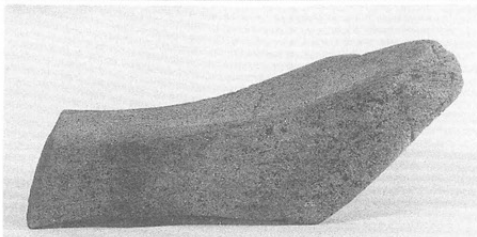
第15図 14号住居跡炭化物



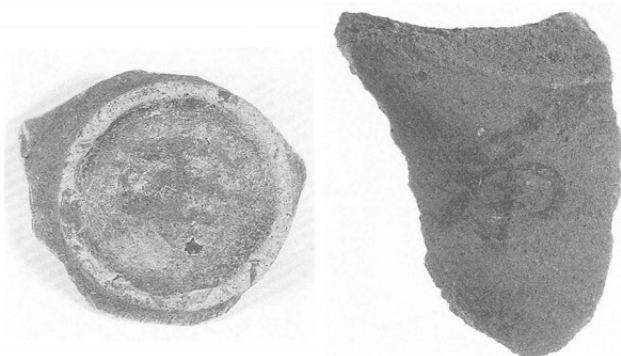
第16図 13号住居跡礫層遺物出土状態



第17図 13号住居跡出土須恵器坏



第19図 13号住居跡礫層出土遺物 須恵器鉢(上)と砥石



第18図 17号住居跡出土墨書土器「王?」「浄」

#### 4. 榎垣根外遺跡山道端地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字山道端2339-1 2339-ロ
2. 土地の所有者 両角 米子
3. 発掘調査の期間 平成元年5月2日～7月2日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 168.2㎡
6. 発見された遺構 平安時代住居跡5棟 掘立柱建物跡1棟  
柱穴22基

**15号住居跡** 平面形は畑の耕作により不明である。床面もほとんど残っておらず、カマドの構築材や焼土の一部が崩れたあとがあり、北カマドであったことが推定される。

**16号住居跡** 平面形は遺構が一部調査区外へ出るが、東西9mもの大きな住居跡であることが明らかとなった。掘り込みは深く、直径20cm前後の礫を非常に多く含んだ礫層であるにもかかわらず、60cm以上も掘り込んでいる。周溝はなく、柱穴は発見されなかった。

カマドは、袖幅2.1m、奥行1.6mとやや大きく、火床面も広く焼土は18cmと厚く焼けていた。煙道はつぶれずに屋外へと延びていた。カマドの中からは炭化種子が出土した。カマドの石組は、大きなものは40cm以上の石を用いている。床面は砂礫層を掘り込んでいるためか、特に貼った様子はないが堅く踏みしめられている。

**20号住居跡** 16号住居跡の上に重なる住居跡で、カマドだけが確認された。立ち上がりは畑の耕作によって確認出来なかったが、カマドの石組は40cm位の大きな石を使っている。床面を検出することができなかった。

**21号住居跡** 16号住居跡の下に重なる住居跡で、そのほとんどが16号住居跡によって壊されている。掘り込みは約44cmあり、東西5mの大きさである。カマドの位置は不明で、16号住居跡カマドの石組を検出中、21号住居跡の北西の角を確認することができた。

**22号住居跡** 16号住居跡の床下からカマドの火床面とおもわれる赤く焼けた面が確認された。遺物もなく、ただ22号住居跡の痕跡が伺われただけである。

**掘立柱建物跡** 確認面から深さ約50cmの柱穴が10基並び、3間×3間の長方形の建物跡が確認された。柱穴の中には拳大の礫が柱を支えるために詰め込まれたのか、きれいに柱痕跡をとりまいているものがあつた。建物跡の長さは7.5m×5.0mほどであると推定され、長軸が南北を正確に向いている。ちょうど重なる15号住居跡との新旧関係は不明である。他に掘立柱建物跡の柱穴と思われるものが22基確認されたが建物跡としての並びはない。



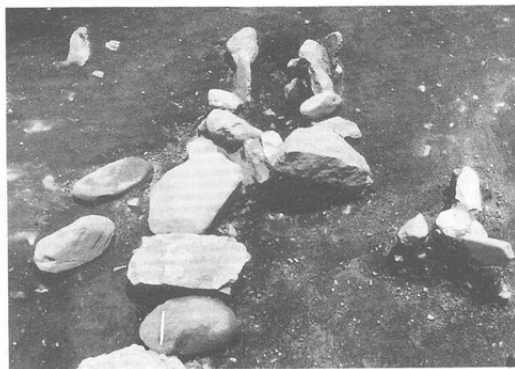
第20図 掘立柱建物跡柱穴



第21図 15号住居跡須恵器大甕出土状態



第22図 16号住居跡カマド石組

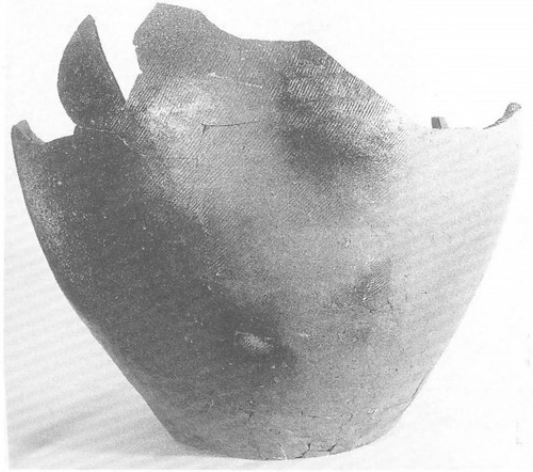


第23図 20号住居跡カマド石組

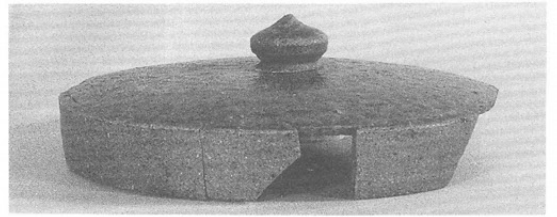
7. 出土した遺物 土師器6 須恵器5 墨書土器片5  
土錘9 刀子3 円面硯破片7 緑釉陶器片1 土器片  
石片7箱

15号住居跡からは、わずかに残った覆土から灰釉陶器  
1点、土師器坏3点が重なるようにしてまとまって出土  
した。また、カマド左脇からはピットの中に肩まで斜め  
に埋まる状態で須恵器大甕が出土した。頸部から上は畑  
の耕作によって破損したのか残っていなかった。

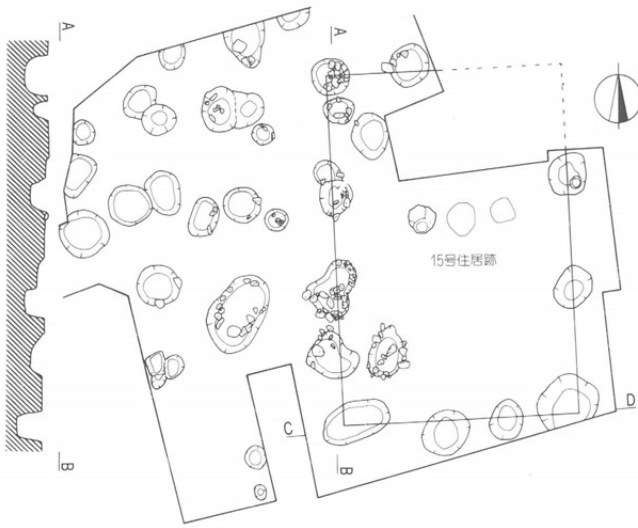
16号住居跡からは多くの須恵器、土師器が出土した。  
破片は覆土中層から床面にかけて多く見つかり、その中  
から円面硯破片7点（2個体）、刀子2点などが出土した。  
土錘はほぼ一箇所から出土しており、網に付いてい  
たものであったと推定される。墨書土器片は「大」の文  
字が土師器坏底部に記されている。



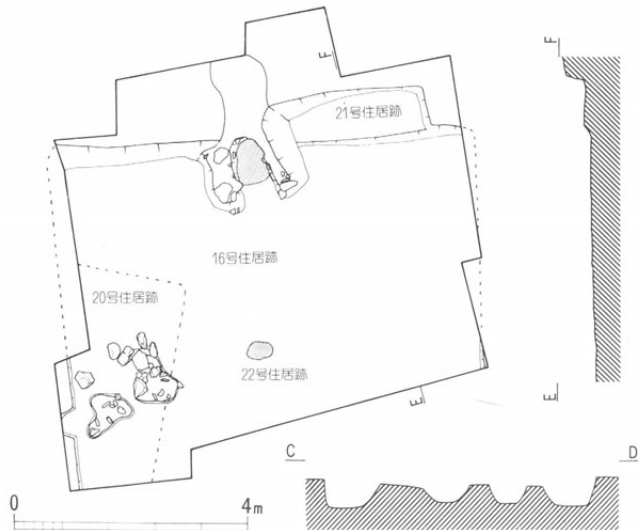
第24図 15号住居跡出土須恵器大甕



第25図 16号住居跡出土須恵器蓋



第26図 16号住居跡出土須恵器  
円面硯破片



第27図 16号住居跡出土墨書土器「大」

第28図 山道端地籍遺構全体図 (1 : 160)

## 5. 榎垣外遺跡<sup>すくも</sup>蟻塚地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字蟻塚3685-9
2. 土地の所有者 今井 崇雄
3. 発掘調査の期間 平成元年6月13日～6月29日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 110.4㎡
6. 発見された遺構 掘立柱建物跡1棟 柱穴6基  
弥生時代小竪穴1基



第29図 掘立柱建物跡柱痕跡

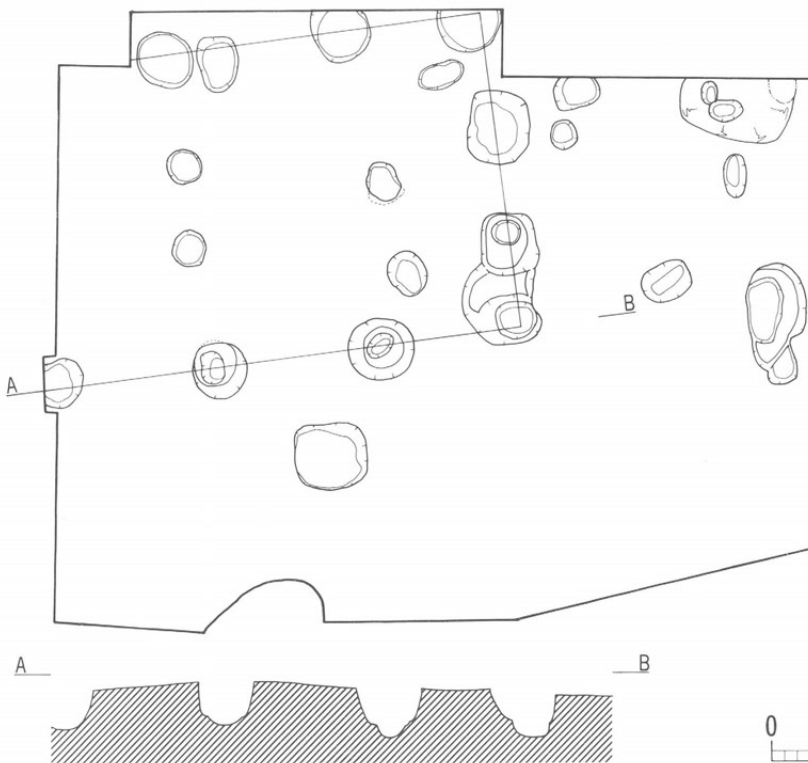
**掘立柱建物跡** 調査区内において柱穴の並ぶものは2間×3間まで確認ができたが、建物跡は調査区外へのびているため、さらに長い建物跡になると思われる。柱穴の深さは確認面から約70cmで、柱痕跡の明確なものもある。他の柱穴は並びを確認することができず、建物跡を検出することができなかった。

**弥生時代小竪穴** 弥生土器片と黒曜石を多く含む小竪穴があり、出土遺物が他の穴とは明らかに異なるため掘立柱建物の柱穴ではないと思われ、弥生時代の小竪穴とした。

今回の調査区は、以前の調査で掘立柱建物跡群が発見された箇所から22mしか離れておらず、多くの掘立柱建物跡が発見されると思われた。実際いくつかの柱穴が検出されたが、建物跡として確認できたのは1棟だけであった。

7. 出土した遺物 縄文土器1 打製石斧2 石鏃1 土器片石片1箱

縄文土器は遺構外からの出土であり小竪穴とは無関係であった。柱穴に伴うと思われる遺物は小さな破片ばかりで完形に復原できるものはない。



第30図 蟻塚地籍遺構全体図 (1:120)



## 6. 榎垣外遺跡下片間町地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字下片間町2373-1
2. 土地の所有者 増澤 秀夫 増澤 貞子
3. 発掘調査の期間 平成元年7月4日～7月24日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 234㎡
6. 発見された遺構 掘立柱建物跡4棟

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡4棟が発見されたが、建物跡全体が調査区内に現れたのは1棟だけで4間×5間（6m×11m）の長方形の建物跡である。他の建物跡は、調査区外へ延びているため全体の大きさが不明であるが、長辺10m以上の大きな建物跡になると思われる。建物跡の向きはほぼ南北を向くものもあるが、異なるものもある。しかし、重複していない建物跡の関係をみると、建物跡の軸が直角に配置されているものもあり、建物跡群としてのまとまりが見られる。柱穴の大きさは、建物跡ごとにほぼ統一された掘り方をしている。

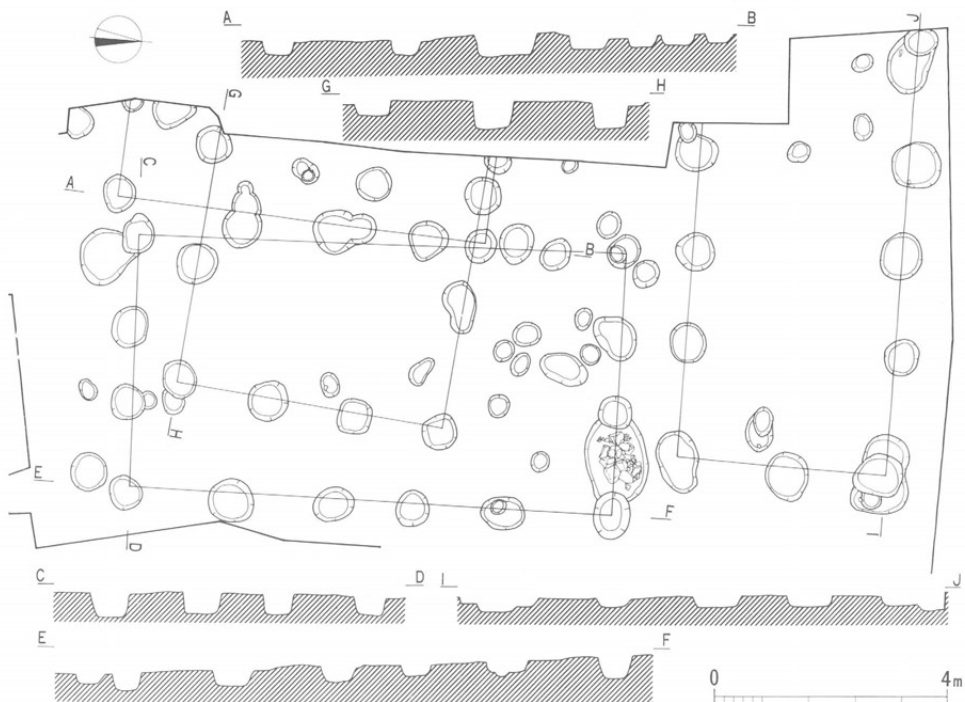
榎垣外遺跡内において、掘立柱建物跡群の発見例は蟠鱗塚地籍に認められ、官衙跡の中枢部の可能性が高かった。しかし、今回の調査によって下片間町地籍においても掘立柱建物跡群が発見され、すぐ南に位置する山道端地籍の掘立柱建物跡や大型住居跡、これらに伴う多くの出土遺物などを併せて考えると、官衙跡の中枢部が何処になるのか、新たな問題提起となった。

7. 出土した遺物 墨書土器片1 土器片石片4箱

出土遺物は、すべて破片で発見された。遺物が主に集中して出土したのは、柱穴確認面よりやや上の暗褐色土から褐色土にかけての僅かな土層からである。しかもまとめて一箇所に、拳大の石と混ざって出土しており、わざわざこの範囲にまとめて捨てとも思える状態であった。しかし、どのような性格のものか明確ではない。



第31図 遺構全体写真



第32図 下片間町地籍遺構全体図（1：160）

## 7. 榎垣外遺跡スクモツカ南遺跡

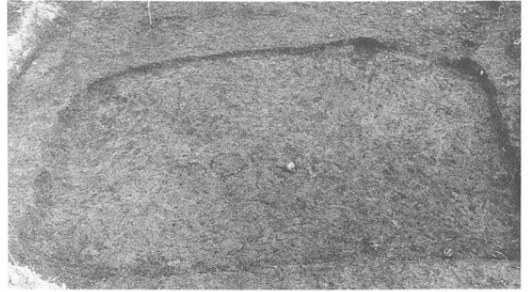
1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字スクモツカ南3136-1  
字蟻塚南3140-2
2. 土地の所有者 山田 剛
3. 発掘調査の期間 平成元年7月20日～7月31日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 55.4 m<sup>2</sup>
6. 発見された遺構 平安時代末期住居跡2棟

**1号住居跡** 平安時代末期の住居跡と思われる。平面形は南北4.5m、東西3.5mのやや歪んだ長方形をしている。掘り込みは約15cmほどで、床面はほぼ平らであるが特に叩き締めた様子はなく、すこし堅く踏みしめた程度である。柱穴、周溝、カマドなどの設備は確認されず正確な時代決定はむずかしい。

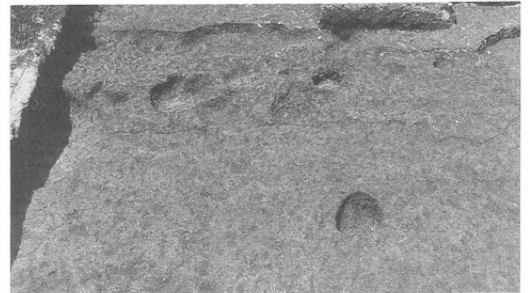
**2号住居跡** 平安時代末期の住居跡と思われ、強く叩き締められた床面を確認することができた。遺物が少なく正確な時代決定はむずかしい。

7. 出土した遺物 鉄製品1 土器片石片若干

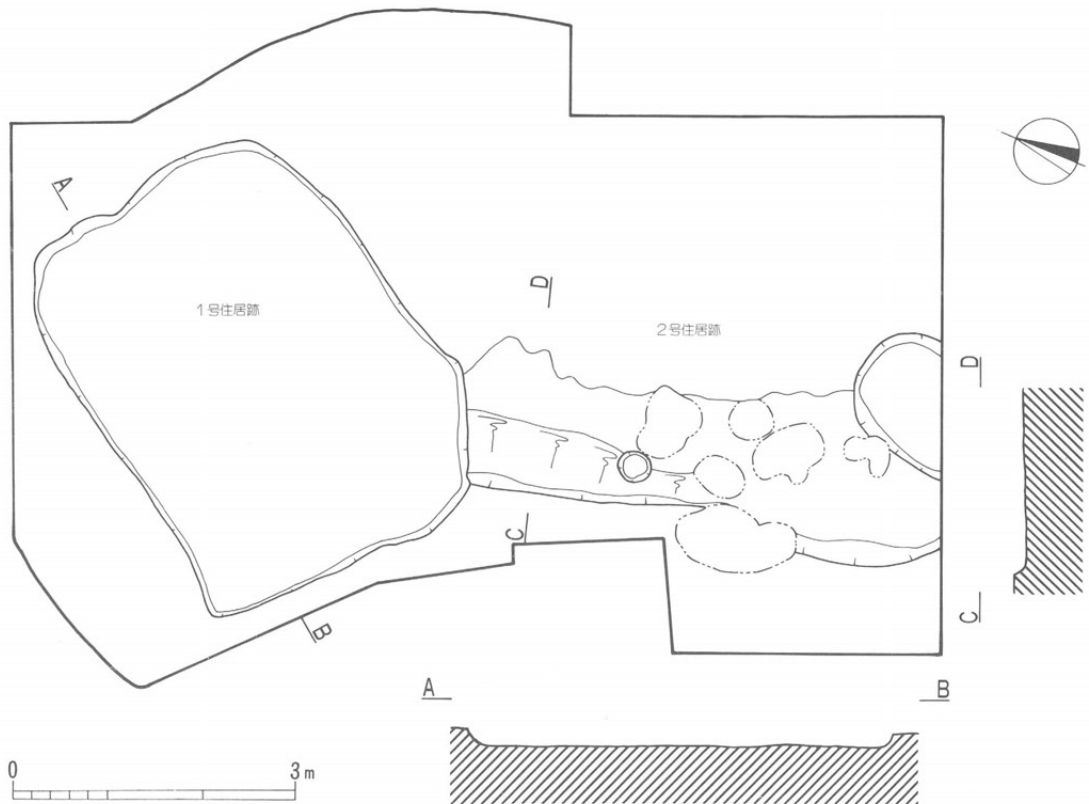
遺構の覆土が薄く、若干量の土師器片が採取されたものの床面においても遺物が少なく、特筆すべき遺物はない。



第33図 1号住居跡



第34図 2号住居跡



第35図 スクモツカ南地籍遺構全体図 (1 : 80)

## 8. 目切遺跡・榎垣外遺跡・清水田遺跡（詳細分布調査）

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地4253-イ他
2. 土地の所有者 長地山の手土地区画整理組合 理事長 小松 裕人 他
3. 発掘調査の期間 平成元年9月1日～2年3月14日
4. 発掘調査の目的・原因 区画整理事業に伴う試掘・確認調査
5. 調査面積 460.5㎡
6. 発見された遺構 縄文時代住居跡1棟 平安時代住居跡3棟 小竪穴15基

今回の調査では、住居跡4棟、小竪穴15基が発見された。調査の結果、特に成果があったのは清水田遺跡であり、単に多くの遺構が発見されただけでなく、特定の場所に時代ごと遺構が分布していることが判った。

清水田遺跡は、遺構があるとされている南向き扇状地の扇頂付近に縄文時代の小竪穴群と住居跡があり、多くの土器片を含んだ焼土のかたまりも確認された。東側の日当たりの良い山裾には平安時代の住居跡がいくつかまとまって分布していることがわかった。扇状地中央付近の広く緩やかな斜面には小竪穴群があり遺物の出土量も多い。さらに一段下がった所にも、小竪穴がかなり高い密度で分布している。清水田遺跡には、大きく分けて2～3箇所の小竪穴群があることが確認された。また、土層観察では数回にわたって土砂崩れがあったことを思わせる地層があり、遺構検出が難しいことが予想される。

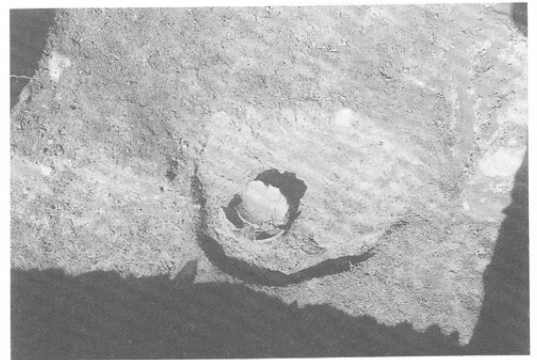
榎垣外遺跡からは、住居跡と思われる落ち込みがいくつか発見され、小竪穴もわずかであるが確認された。以前の調査でかなり遺構の範囲は限定されているものの、これをさらに確実なものとし、確認もれのないように未調査部について集中的に調査を行うことができた。今回確認された平安時代住居跡は、榎垣外遺跡の集落としては最北端に位置するものであり、奈良・平安時代における集落の広がりを知る手掛かりを得ることができた。

なお、今年度は目切遺跡の試掘・確認調査は行うことができなかった。

以上、かなり広範囲に及ぶ2遺跡の試掘・確認調査であったが、序々に遺構の密集地を捜し出すことができそうである。今後本調査に先立って、さらに試掘・確認調査をすすめる上におおいに参考となる貴重な資料を得ることができた。

7. 出土した遺物 石鏃4 凹石6 土器片石片5箱  
縄文土器1 灰釉陶器1 土師器1

遺物出土量はトレンチごとに差が大きく、遺構の発見されたトレンチとその周辺のトレンチからは、やはり遺物出土量が多い。平安時代の遺物を見ると遺構の分布状態と一致しており、あまり移動せず一定地に生活していたことを遺物の面からも裏付けている。



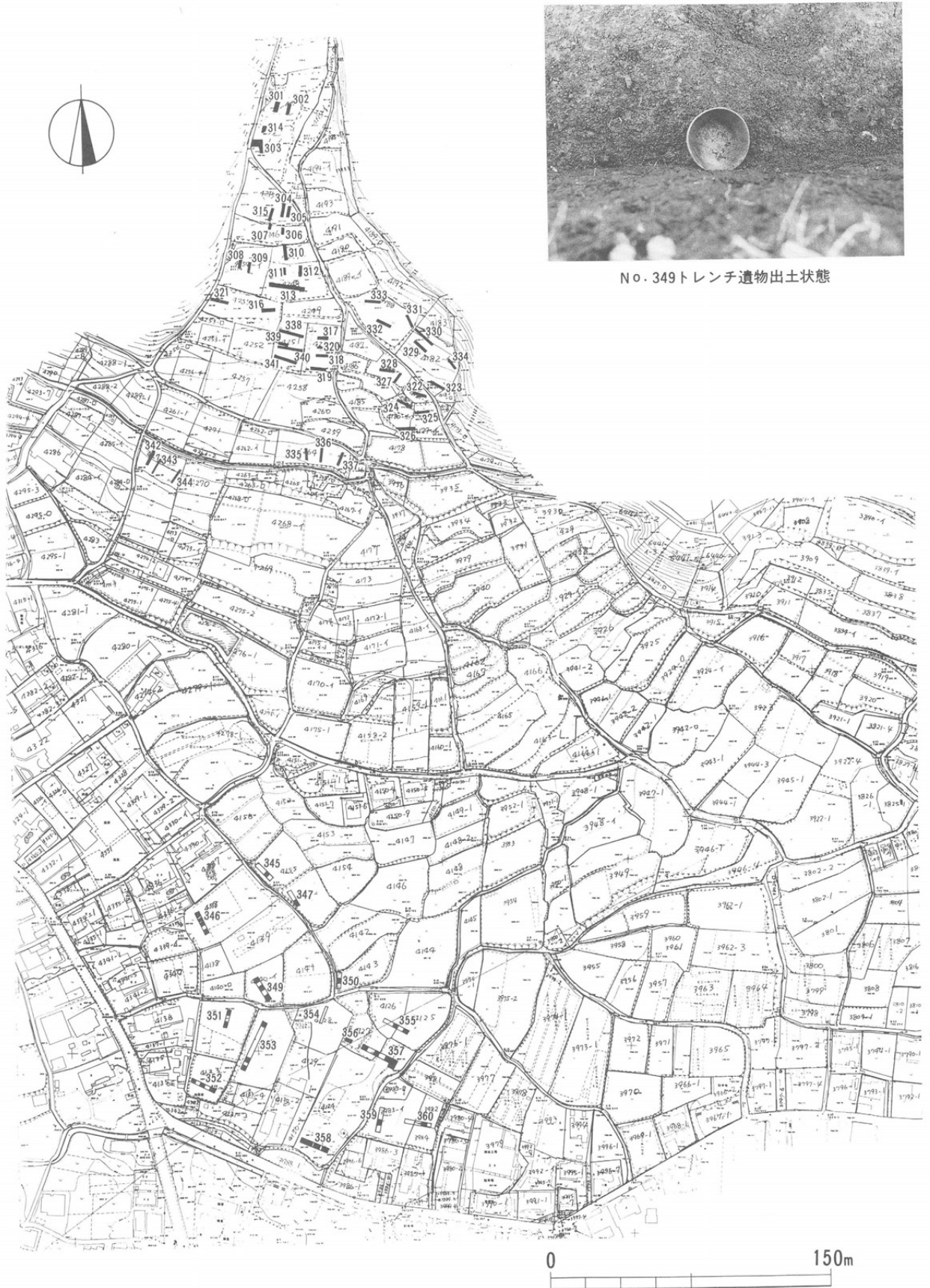
第36図 No. 340トレンチ出土遺物



第37図 No. 332トレンチ平安時代住居跡土層セクション



第38図 No. 318トレンチ土層セクション



No. 349トレンチ遺物出土状態

第39図 区画整理事業に伴う試掘・確認調査トレンチ位置図 (1 : 3000)

## 9. 梨久保遺跡山之神下地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字山之神下4443-5  
4443-6
2. 土地の所有者 原 進
3. 発掘調査の期間 平成元年10月2日～11月8日
4. 発掘調査の目的・原因 共同住宅建設
5. 調査面積 60.7㎡
6. 発見された遺構 縄文時代住居跡2棟 小竪穴2基

**138号住居跡** 平面形は畑の耕作によって壊されているため全体の約1/4しか残っておらず床も部分的に残っている状態である。掘り込みは約17cmで、周溝はない。柱穴は2基確認され、壁際に数本並ぶものと思われる。部分的に残っている床面は堅く貼ってある。住居跡中央よりやや北側と思われるところから、直径約15cm程の石を4つ使った小さな石囲炉が検出された。そして炉に切られるようにして、下からもう1つの石囲炉と思われる炉の火床面と炉石が確認された。これは、他の住居跡との切り合いを示す唯一の発見となり、下に重なる住居跡を139号住居跡とした。

**小竪穴** 発見された小竪穴は、住居跡が発見された場所より少し離れた西側にあり、人頭大の礫を含む礫層を掘り込んでいる。深さは約30cmである。

地山の傾斜を比較すると、小竪穴はやや高い所にあり、住居跡はこれより少し低い東側の凹地になるところにある。

7. 出土した遺物 打製石斧3 石錐1 凹石1 石鏃1 土器片石片1箱

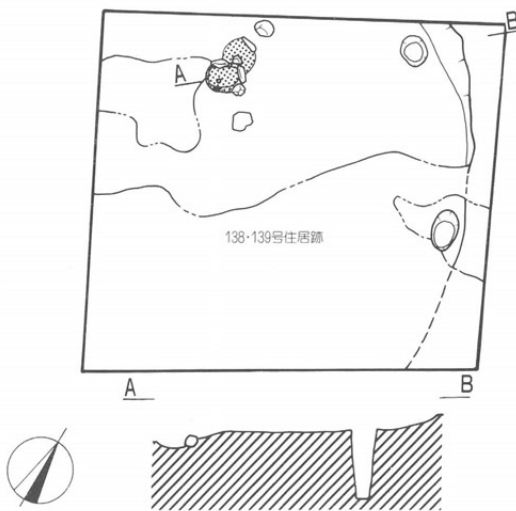
住居跡の残存状態が良くないため遺物の出土量も少なく一個体に復原できる土器もない。小竪穴からは、ほとんど遺物の出土がなく特筆する遺物はない。



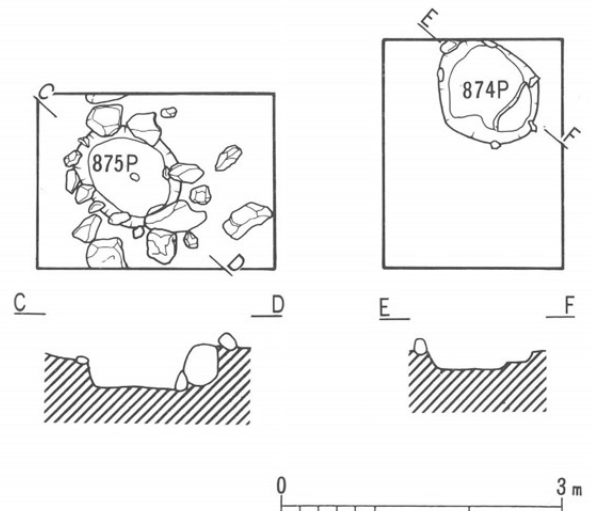
第40図 138号住居跡



第41図 175P小竪穴



第42図 138・139号住居跡 (1:80)



第43図 小竪穴 (1:80)



## 10. 梨久保遺跡上の平地籍

1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字上の平4595-2 4595-11
2. 土地の所有者 原 實衛
3. 発掘調査の期間 平成元年11月10日～11月21日
4. 発掘調査の目的・原因 住宅建設
5. 調査面積 80㎡
6. 発見された遺構 縄文時代住居跡1棟 平安時代住居跡2棟

**1号住居跡** 平面形は畑の耕作によって壊されているため不明である。しかし、わずかな焼土と土師器片を採取できた位置から推測して、東カマドの住居跡であることがわかった。平安時代の住居跡である。

**2号住居跡** 縄文時代中期の住居跡で、南半分を畑の耕作によって壊されているが北側半分は良く残っていた。平面形は長径約5mと推定される楕円形の住居跡で、壁は30cmほど残っている。周溝はほぼ全周していると思われる。柱穴は4個確認されたが、床面が半分以上攪乱されているため、他にも柱穴があったと思われるが確認されなかった。炉は約1m四方で深さ43cmの石囲炉である。しかし、炉石は1号住居跡を作るときに壊されたものと思われ、石のあった痕跡がくっきりと残っていた。

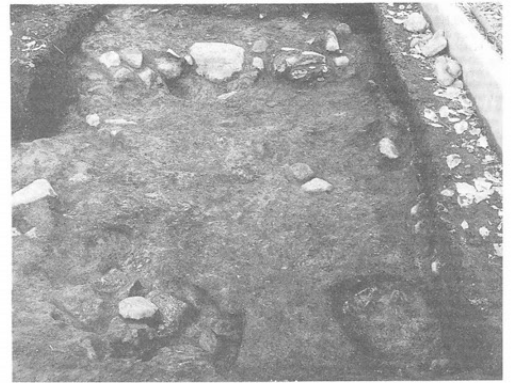
**3号住居跡** 平安時代の住居跡と思われるが、平面形はそのほとんどが畑の耕作により壊されていたり、調査区外へ延びているため全体の1/4だけが調査の対象となり詳しいことは不明である。北側の壁の立ち上がりは28cm残っている。カマドは、コンクリートの壁によって壊されているため、左袖部を確認できただけである。柱穴は3基確認された。礫を多く含む地山を掘り込んで作られた住居跡である。

7. 出土した遺物 縄文土器1 縄文小型土器1 石鏃2 石錘1 土師器2 鉄製紡錘車1 土器片石片2箱

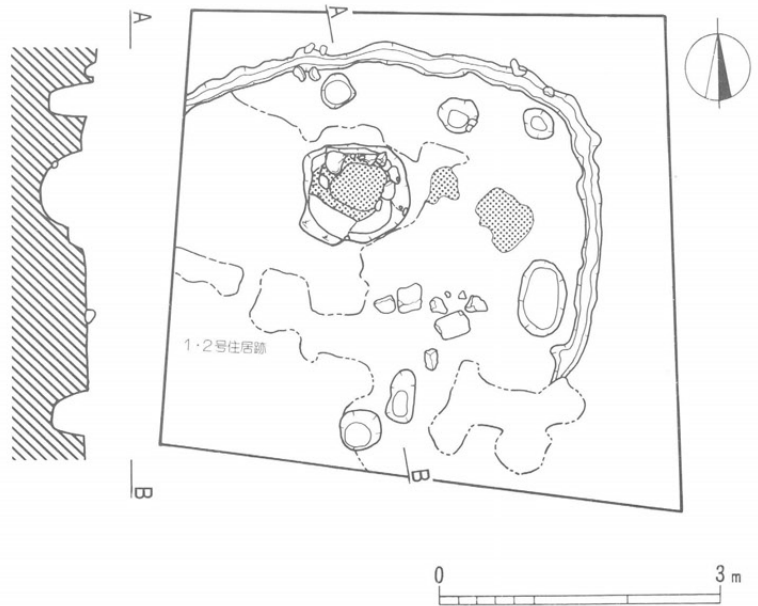
約1/2個体の深鉢形土器と小型土器は2号住居跡北側の周溝付近から一諸に出土した。小型土器は傷1つない完形品である。特殊な遺構であった可能性があるがはっきりしない。土師器は3号住居跡カマド左袖壁際から出土した。床に貼り付いた状態ではなく壁に寄り掛かるような状態であった。鉄製紡錘車は、住居跡覆土からの出土ではなく、3号住居跡付近の耕作土からの出土であった。



第44図 2号住居跡出土小型土器(高さ9.8cm)



第45図 3号住居跡



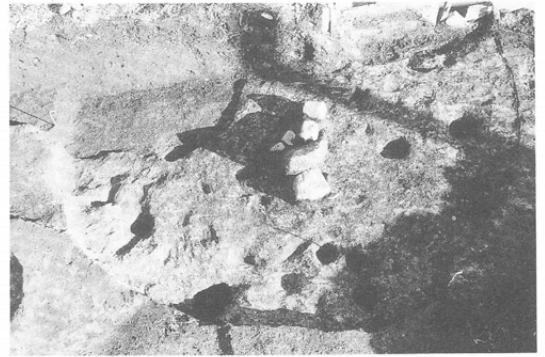
第46図 1・2号住居跡(1:80)

## 11. 梨久保遺跡上の平地籍

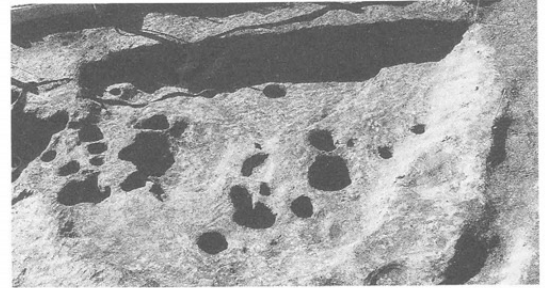
1. 発掘調査の場所 岡谷市長地字上の平4586
2. 土地の所有者 麻原 利夫
3. 発掘調査の期間 平成元年12月4日～12月28日
4. 発掘調査の目的・原因 擁壁工事及び住宅工事
5. 調査面積 129.3㎡
6. 発見された遺構 縄文時代住居跡10棟 小竪穴22基

**130号住居跡** 平面形は南側の一部を畑の耕作によって壊されているが、直径約3mの円形の住居跡と推定される。北壁は16cmの立ち上がりを残すが、4基の小竪穴と重複している。柱穴は6基確認され、床はローム層を掘り込んだ堅い床である。炉は床面をやや凹めただけのもので焼土層も1cmとあまり厚くない。14号住居跡に切られていることが明らかとなった。

**83・131・135・136号住居跡** 以前の調査で83号住居跡の存在は確認されていたが、今回新たに3棟の住居跡が重複していたことが明らかとなった。83号住居跡は、中でも最も新しい住居跡で、平面形は直径約3.7m、北壁は50cm、南壁は12cmの立ち上がりがある。覆土は上部・下部（所謂逆三角堆土、三角堆土）に明確に分かれ一括土器は逆三角堆土下層、つまり三角堆土上面につぶれて堆積していた。床面はほぼ水平で住居跡中央部に掘り込みの浅い炉がある。周溝はない。131号住居跡は畑の耕作によってすべて壊されており、ほんのわずかに炉穴の底の部分が残っただけである。135・136号住居跡は床面の高さが同じで、床面の様子も似ており切り合い関係は不明である。両者とも、住居跡のほとんどを84号住居跡に切られているため炉の位置は不明である。柱穴は数基確認されたが重複が激しいため、どの住居跡に伴う柱穴であるか明らかにできなかった。



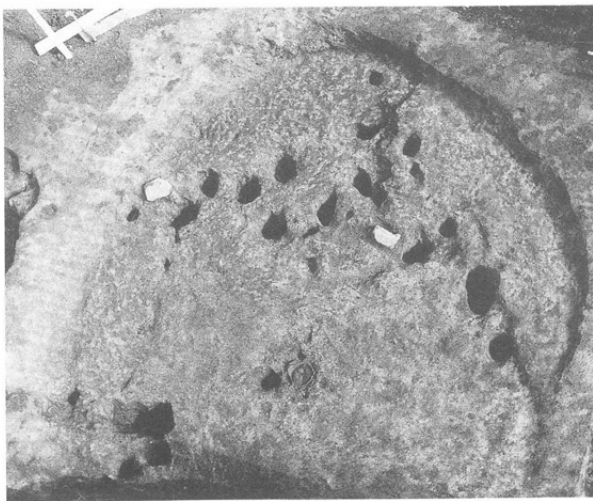
第47図 130号住居跡



第48図 83・131・135・136号住居



第50図 84号住居跡埋壺炉



第49図 84・133・134号住居跡

**84・133・134号住居跡** 84号住居跡は以前の調査で確認されていたが、今回新たに2棟の住居跡が重複していることが明らかとなった。84号住居跡の掘り込みは、確認面より45cm掘り込んであり、平面形は直径約3.5mの略円形である。床面はほぼ水平で住居跡の中央に埋甕炉がある。周溝はなく、北側一部に一段高いテラス状の段がある。

覆土の中からは直径20cm位の石が土器片とともに数多く出土した。133・134号住居跡は、84号住居跡に大きく切られており、ほとんど床面を残していない。特に134号住居跡は84号住居跡と133号住居跡の間に挟まれて、遺物もほとんどない。133・134・84号住居跡の順に新しくなり、スライドするようにほぼ同レベルのまま重なっているが、特に133号住居跡の床面は水平で固く踏みしめられている。柱穴は84号住居跡と134号住居跡の間に多く検出された。84号住居跡内にはもっと柱穴があるものと思われたが検出されなかった。

**132号住居跡** 平面形は円形の住居跡であると思われるが、全体の約1/4のプランが確認されただけなので正確な大きさは不明である。84号住居跡と同様に北側に床面より一段高いテラス状の段が設けてある。壁は約40cmあり、周溝は部分的に設けられている。柱穴は4基確認され、約45cm前後の深さがある。ほかにも深さ38cmで柱穴よりやや大きな直径60cmのフラスコ状ピットが確認された。炉は、直径20cm大の石を7つ使った石囲炉で、焼土は1.5cmの厚さがある。

**137号住居跡** 132号住居跡の下に重なっている住居跡である。132号住居跡石囲炉に切られるようにして埋甕炉が確認され、137号住居跡の存在が明らかとなった。埋甕炉は、石囲炉によって半分壊されているが、土器周辺の焼土は厚く6cmほど焼けている。住居跡のプランは不明である。

**小竪穴** 小竪穴は全部で22基確認された。この内小竪穴の基底部に直径20cm大の石が入っているものが6基、さらに石は確認されなかったものの、この小竪穴と深さ大ききなどが良く似ている小竪穴が11基確認された。骨の出土はないが、おそらく土壙墓であろうと推測される。なお、以前の隣地第9次調査では土壙墓群が発見されている。

870Pは、確認面より約130cmの深さがあり、壙底部がひろくなった、フラスコ状の小竪穴に近い形状である。中からの出土遺物はほとんどなく、土器片が少量出土しただけである。

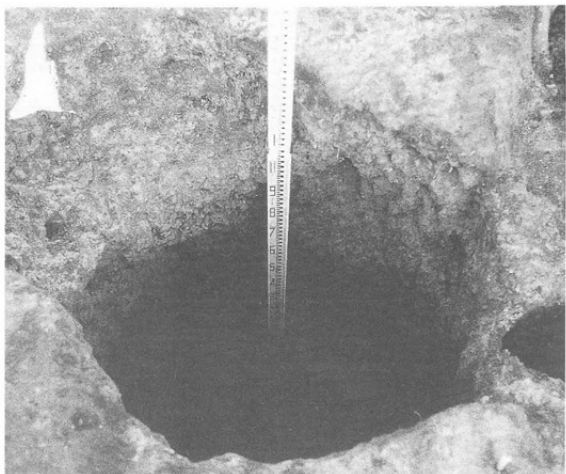
872Pは、深さ50cm程の穴であるが、他の小竪穴と異なり壁の上部が赤く焼けていた。壙底部はやや熱を受けた程度であるが、穴の中には焼けた礫が277個以



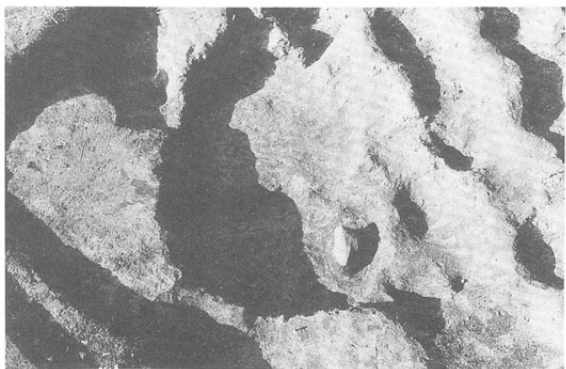
第51図 132号住居跡



図52図 132号住居跡石囲炉



第53図 870P小竪穴



第54図 855・856P小竪穴



上入っていた。この礫は焼けの弱い壙底部よりも、壁が赤く焼けていた付近の覆土中層から上層にかけて多く詰まっていた。礫の中には幾つかの凹石が含まれていた。

7. 出土した遺物 縄文土器 20 打製石斧 27 磨製石斧 4 石鏃 32 石錐 5 石匙 2 石錘 1 磨石 3 穀摺石 1 凹石 31 石皿片 5 砥石 1 叩き石 1 不定形石器 13 土製円板 7 土器片石片 8箱  
一括土器の中で約半分の9点は、83号住居跡覆土上部（逆三角堆土）からの出土である。また、132号住居跡からは7点もの一括土器が出土し、完形に復原された土器もある。84・137号住居跡の埋甕炉は中期初頭梨久保式土器である。

石器は石鏃と打製石斧、凹石が多く出土している。83・132号住居跡からの出土は特に多く一括土器の出土状態に比例している。



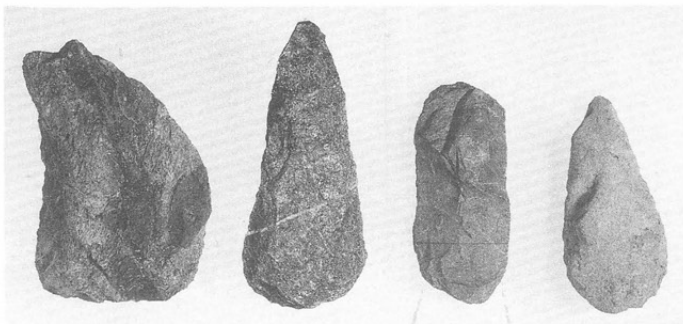
第55図 83号住居跡土器出土状態



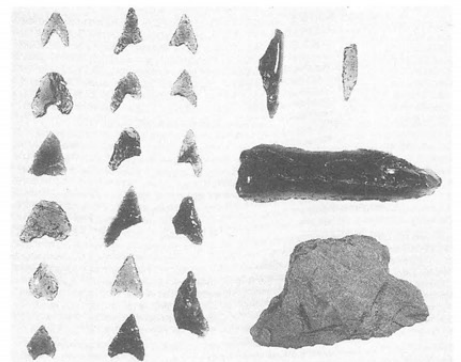
第56図 132号住居跡出土土器（復原前）



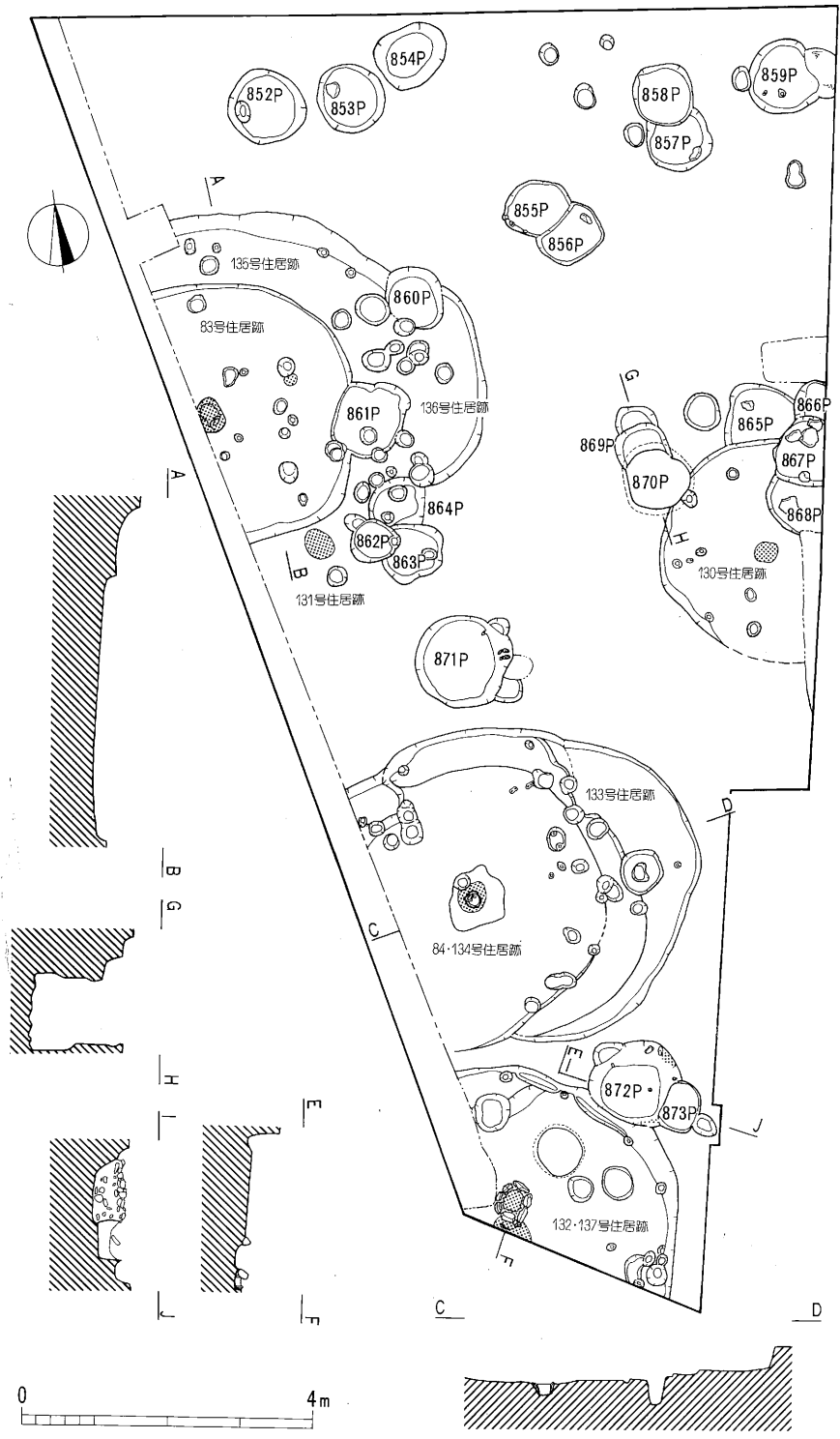
第57図 132号住居跡出土土器（復原後）



第58図 打製石斧



第59図 石鏃・石錐・石匙



第60図 上の平地箱遺構全体図 (1 : 100)

